

現代青年の充実感に関する研究

大 野 久

問題および目的

青年期が自我の確立、アイデンティティの確立の時期であることは、これまで多くの心理学者によって指摘されてきた（たとえば Erikson, 1959 など）。したがって、青年期における充実感を健康なアイデンティティ統合の過程において感じられる自我の高揚、拡大感、自己肯定的感情、および、それとともなって感じられる生活気分、生活感情として考えた場合、充実感について研究することは、青年期の心理の1側面を理解するのに非常に興味深い問題である。

大野（1981）は一連の現代青年の充実感に関する研究から充実感モデルを提出し、西平（1979）の現代日本青年の心情モデルとの比較・検討を行ない、この2つのモデルを統合して、現代青年の充実感は「自信-自信のなさ」、「自立-甘え」、「信頼（時間的展望）-不信（時間的展望の拡散）」、「連帯-孤立」の4本の軸によって説明でき、さらに、その4本の軸が全体としてアイデンティティ統合の方向と一致しているという充実感・生きがい感モデル（図1）を提出した。

したがって、本研究の目的としては、

(1) 従来、大野（1980）の充実感を測定するための質問項目には含まれていなかった「自立」、「甘え」についての項目群を作成し、これを含んだ充実感尺度を実施、分析することによって、充実感・生きがい感モデルの妥当性を検討すること。

(2) モデルの妥当性が一応確かめられたならば、このモデルに示された現代青年の充実感には、どのような特徴があるのかを明らかにすること。

(3) 以上のような数量的方法で得られた現代青年の充実感についての一般的知見が、具体的な現代青年の生活の中での充実感を説明するのにどのように対応するのかを明らかにすること。

以上の3点を目的とする。

方 法

2 国立大学学生、1, 2 年生の男子 112 名、女子 106 名、計 217 名の同一対象に対して、充実感を測定するための53項目からなる充実感尺度を3週間の間隔において2回、平行して併存的妥当性を検討するための Purpose

in Life Test (PIL) を1回実施した。実施期日は1981年6月、7月であった。なお、充実感尺度の信頼性には十分に高い値が得られた ($\alpha = .96$)。また、再テスト法による信頼性 ($r = .84$)、PIL との併存的妥当性 ($r = .87$) にも十分に高い値が得られた。さらに、充実感尺度に対して、高得点、低得点を得た被験者10名に対して面接調査を実施した。面接調査は1981年11月、12月に実施された。

結 果

「自立」、「甘え」の項目群については、「一般的充実感気分」、「退屈感」、「空虚感」の項目群との間に有意な相関があった ($|r| = .40 \sim .53$ いずれも $P < .001$)。

また、充実感尺度を因子分析（主因子解、バリマックス回転）することにより、以下の4因子が見出された。以下の4因子で全分散の44%を説明している。

第1因子「充実感気分-退屈・空虚感因子」

(21) 「毎日、毎日、変化のない単調な日々でつまらない。」(因子負荷量 -.73)

(12) 「生活に充実感で満ちた楽しさがある。」(因子負荷量 .70) などの因子負荷量の絶対値 .40 以上の16項目。

第2因子「自立・自信-甘え・自信のなさ因子」

(8) 「私は精神的に自立していると思う。」(因子負荷量 .68)

(34) 「私は主体的に生きていると思う。」(因子負荷量 .65) などの因子負荷量の絶対値 .40 以上の13項目。

第3因子「連帯-孤立因子」

(31) 「だれも私を相手にしてくれないような気がする。」(因子負荷量 .65)

(13) 「私ひとりだけがとり残されているようで寂しい。」(因子負荷量 .63) などの因子負荷量の絶対値 .40 以上の10項目。

第4因子「信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散因子」

(48) 「自分の責任をはたすことに喜びを感じる。」(因子負荷量 .55)

(42) 「生まれてきてよかったと思う。」(因子負荷量 .54) などの因子負荷量の絶対値 .40 以上の11項目。

さらに、各因子で高因子負荷量を得た項目によって再構成された因子別下位尺度間には、ほぼ、高い相関が見られた ($r = .47 \sim .61$ すべて $P < .001$)。

次に、男女間の充実感尺度に対する反応の違いを分析したところ、全体得点には有意な差は見られないが、「自立・自信」の内容を示す項目について、男子が女子に比較し、有意に高い得点を得た。

さらに、見出された4因子についてBentler (1973)のIdentical factor score methodを用い、充実感尺度の時系列データについて分析を行なったところ、第1因子「充実感気分-退屈・空虚感因子」は、他の因子に比較して、因子内の個人の位置が変動し、不安定な状態 (state) に近い性質をもつ因子であり、第2因子「自立・自信-甘え・自信のなさ因子」と第3因子「連帯-孤立因子」また、若干、項目の一貫性に検討の余地はあるが、第4因子「信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散因子」は、因子内の個人の位置が変動せず安定しており、特性 (trait) に近い性質を持つ因子であることが明らかになった。

最後に、この調査を受験した被験者の中から典型的な高得点、低得点を得た被験者について面接調査を行ない、充実感・生きがい感モデルに示された軸が、現代青年の現実場面における充実感、空虚感とどのように対応するか、2例の青年について分析した。その結果、青年の充実感は、その青年のアイデンティティと全生活空間の両方に大きく影響されることが確認され、このことを分析する上で、モデルに示された軸がより有効な枠組を与えてくれるという結果が得られた。

討 論

この結果、充実感・生きがい感モデルの妥当性について検討してみると、「自立-甘え」の次元は、現代青年の充実感を説明するのに有効な軸であることが明らかになった。しかし、モデルで予測されたように、「自立-甘え」の軸は、因子分析によって単独の因子としては算出されず、「自信」の項目群と結びつき、「自立・自信-甘え・自信のなさ因子」として算出された。このことは、モデルに示された「自立-甘え」と「自信-自信のなさ」がそれぞれ別の内容を示しているのではなく、近い内容について別々の側面からとらえているという可能性が高く、この2つの軸を統合して、「自立・自信-甘え・自信のなさ」という軸によって、他の「連帯-孤立」、「信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散」の軸とともに現代青年の充実感が説明できるのではないかというモデル修正の可能性のあることが示唆された。

しかし、上述の問題を除けば、各因子別下位尺度には

ほぼ高い相関があることが認められ、相互に相関をもちながら、全体として充実感・空虚感を構成しているというモデルを支持する結果が得られた。

さらに、このモデルについてErikson (1959)の漸成理論から考えた場合、「充実感気分-退屈・空虚感」は充実感の生活気分や生活感情の側面を示し、「自立・自信-甘え・自信のなさ」は、青年期に達成すべき発達課題「アイデンティティ対アイデンティティ拡散」に対応し、「連帯-孤立」は初期成人期の発達課題「親密さ対孤立」に、同様に、「信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散」は乳児期の発達課題である「信頼対不信」とその青年期における現われである「時間的展望対時間的展望の拡散」に対応すると考えられる。そして、これらの発達課題が漸成的な関係で相互に関連しあっているという漸成理論と、各発達課題と対応関係をもつ軸がそれぞれ相関をもつ形で充実感を構成しているという充実感・生きがい感モデルとは理論的に合致していると考えられる。

また、充実感・生きがい感モデルに現われた現代青年の充実感の特徴について検討してみると、まず、男女間には充実感尺度の全体得点に有意な差はないが、男子と女子には充実感を感じる内容の違いがあることが明らかになった。さらに、Identical factor score methodを使用した因子分析によって、「充実感気分-退屈・空虚感因子」は他の因子に比べ、比較的安定で状態に近い性質を持ち、その他の因子は比較的安定しており、特性に近い性質を持つという結果が得られた。このことは「充実感気分-退屈・空虚感因子」が充実感の生活気分・生活感情の側面を示し、他の因子は、アイデンティティ理論の中の各発達課題に対応し、アイデンティティの実感にかかわる問題を示しているとする本研究の理論的予測に合致する結果であった。

さらに、面接調査によって、モデルに示された軸が現実生活における現代青年の充実感を説明する上で有効であることが確認された。

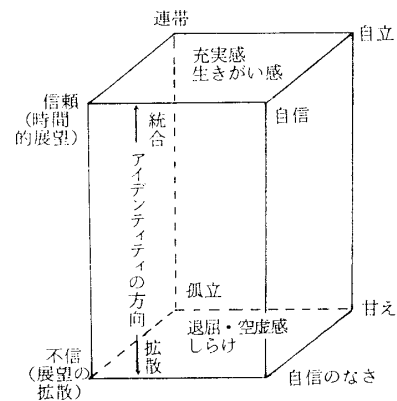


図1 充実感・生きがい感モデル